藝州 嚴島圖會

三

嚴島圖會巻之三

目録

阿たゝ島
長浦
須屋浦
須屋浦神社

牛王社
須屋清水
新贄浦
猪子坂

御床浦
御床浦神社
牛王社
大川浦

大江浦
貝売塚
内侍岩
室濱

鵜泊
蹈鞴浮
鱠浦
江浦

綱浦
蛭子社
浅黄櫻

以上島巡の次第に依て記せところなり以下ハ大宮の後の方より起りて西町瀧町に越ゆる

預坊
寶泉院
大願寺
大藏坊

泉光院
大元浦
大元神社
橋山

道祖神社
あを山
廃仙藏坊
十王堂

廃真珠院
石風爐
經の尾
西町

神廐
華藏院
地藏院
廃連乗坊

多寶塔
廃多寶院
陶全姜陳所
行宮趾

大湯屋趾 釜石
南風燈趾
廃瑞光寺
紅葉谷

旧宮
以中庵
若宮原
大聖院

瀧本坊
龍燈院 龍燈抜
増福坊
愛染院 影向石

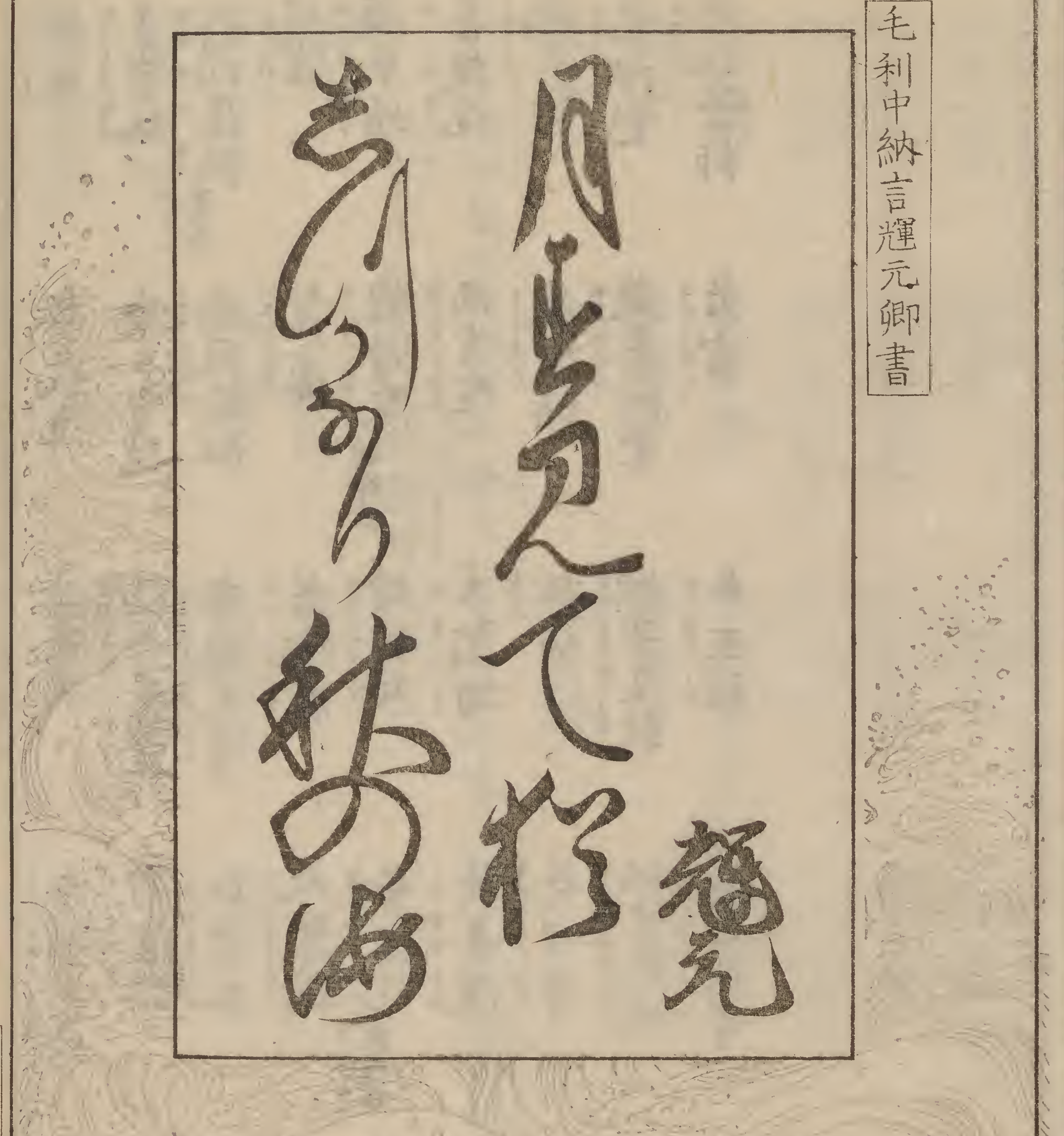
菩提院
西方院
多聞坊
修善院

執行坊
東泉坊
松坊
長楽寺

荒神堂
瀧薬師堂
棚守屋敷
弘中戦地

中江薬師
若宮
牛王社
廃永元寺

毛利中納言輝元卿書



嚴島圖會巻之二

長濱 一名八重濱ともいふ

方五町の入江ありて沙濱潔白なりこの處にも櫻数株ありて花の時観賞すべし是より聖崎まで乃間小なる浦大魚切浦清水が浦米が浦屛風が浦浦々の名あり

蛭子社 日取より鳥居なり 拝殿

聖崎 三十間ばかりの洲嘴ありて風景の処なり

よもすがら浪しづかなる時にあひて聖がさきをみえつるかな　曼珠院法親王

蓬萊巖

聖崎の北にあたりて海水のうへにたてり巖上に古松数株ありて海風にもまれ容姿おのづから造りなせるがごとし世に画がくなる蓬萊山といふものに似たる故に名とす又別に蓬萊と称するものなり三巳月の

長濱(ながはま) 荒蛭子社(あらえびすのやしろ)



題長濱荒夷社廟壁　石川丈山

華表立庭高突兀堂如神廟室桑門禅心本是無他佛江上青山不動尊



頃風恬かに波穏かなる時此處より浮出づその粧ひ金銀瑠璃を以て砂とし其上松柏生茂り或ハ宮殿樓閣の象ありて其荘厳たぐへん物なし光明海上に彩きらりて次第に消滅をいまも往々是を見る人あり多くハ丑日に現るといふその由縁を知らず近世橘南谿が著せる西遊記に安藝國に蜃樓ありといへるハ恐らくハ是をいふなるべし

姥懐 入江ありてこの處より島の東邊にして波穏かなりよりてこの名あるなるべし

江浦 入江あり

萩浦 沙濱五町余松萩森々たり一名揖生の浦ともいふよしを傳ふ

萩浦神社 祭神底津少童命 島巡第一の拝所

いく世をか次ぎの浦にかふく音も神さびわたる此松が宮　中納言持豊

金岡水 同浦より二町ばかりにあり

この水清潔井洌にして地海にちかけれども絶て鹹氣なし傳へいふ佐伯郡廿日市の洞雲寺金岡和尚此處に座禅せられしことありその時たちまち涌出したりとぞ彼寺にもとより金岡水といふ名水ありて此水と氣脉相通ぜるよしもしくハ權者修行の感應によれる歟

櫻川 櫻の木おほし

火房江 むかし島巡の船中に清火せざりし者ありしが変にあひて船やけし故にこの名ありといふ

包浦 沙濱三町あり

此浦ハ明神降臨のむかし平墨をくだし置たまひしによりて磯なる石ことごとく墨の形になれりかかれバつゝみの浦と名づくるよし陰徳太平記に見えたり七浦の一なり

包浦神社 祭神塩土翁

聖崎（ひじりさき）

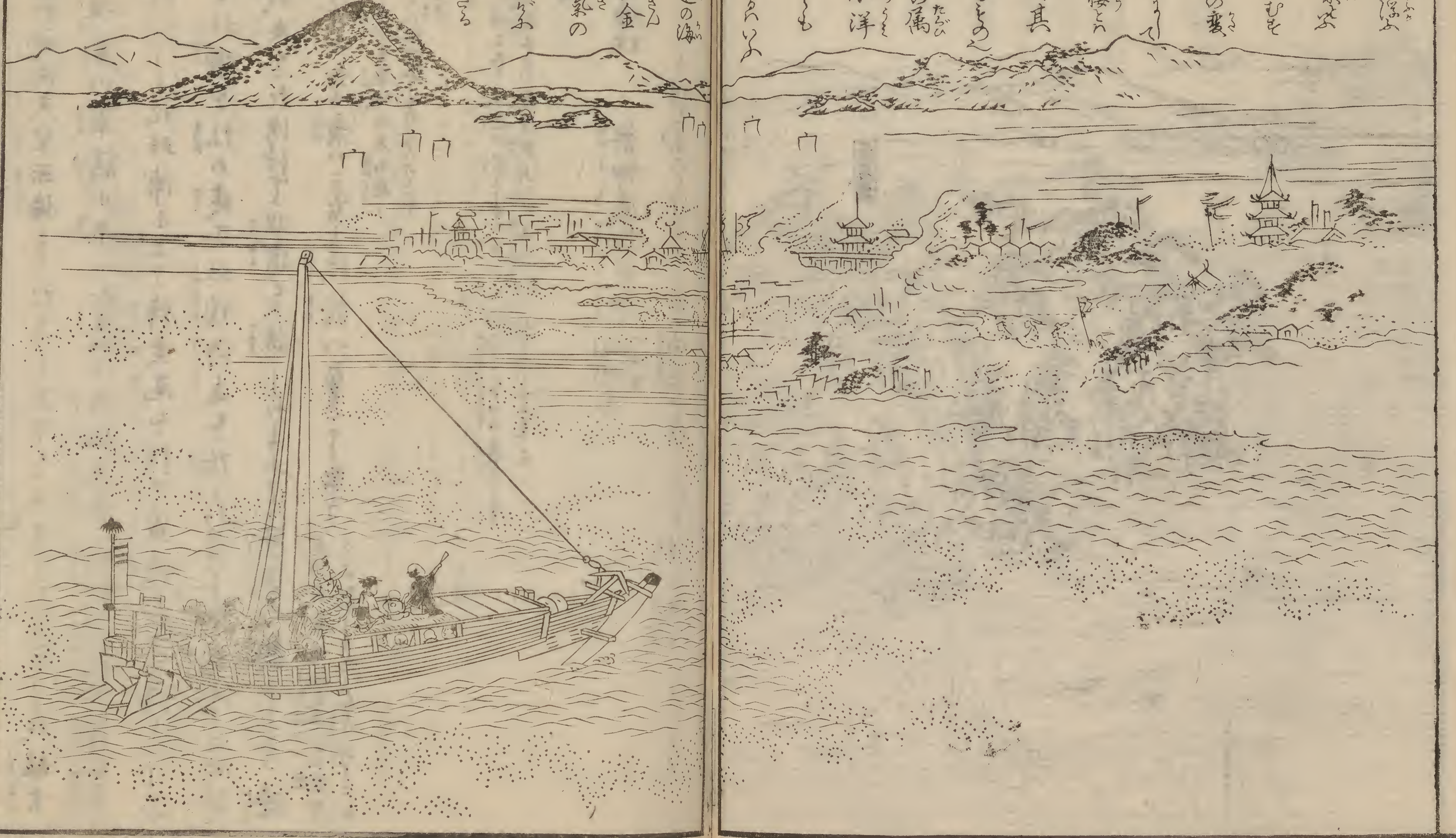
自宮島還草津舟中　茶山

揭起孤蓬時指顧
仙山只在雲深處
江天千雨渺茫中
短艇嘔啞皷棹去



嚴島海上にうかぶ
ところの蓬莱なる
ものハ海氣のむす
ぼれて種々の變
態をなすものにして
所謂蜃氣樓とハ
趣を開らして其
實ハ異なるものゝ
蜃ハ蛟龍の属
ましてかゝる小洋
にあるべきとも
覚え侍らねバ

嚴島四邊の海
底ハ是れ沙金
ましてその金氣の
發するなりとぞ
精英の氣さる
ことわりも
あらんかし



太古ハ神武天皇西偏よりおこりて天下を平定したまひしと紀塩土翁惟幕の軍議ニ参りたまへり弘治元年毛利元就の陶全姜を討れしと此浦ニ上り博奕尾を経て軍縁ニ利を得られしかば後ニ社壇を改め建て社領許多を附られしと氏按ふニこの神の義兵をたすけて非道を誅したまふこと歴史の載るところ瞭然たり士たる者ハ之なるべ須請づ爲きことなり

包の名義陰徳太平記の説甚ろくハなやまりなるらん今詳ニ知

かさしよハへども祭神の名相近し

しおつちの訛てみとなれるにハあらじや

献浦 沙濱一町

千献岩 同浦にあり平面の岩にして長さ五間或云千口の義にして石面千口の魚を列ぶべし蓋漁人の言ひいでたるなるらん

鷹巣浦

鷹巣浦神社 祭神底筒男命 島廻第二の祭所

と紀ハ木のかげもたかき業の浦浪をうけてそなはる神の廣前

中納言持豊

上居濱 沙濱五町方二町の池あり水禽多し

下居濱 沙濱三町

腰細浦 沙濱三町入江あり

腰細浦神社 祭神中津少童命 島廻第三の社

伊豫松 同浦にあり高五六丈傳へいふ昔伊豫の人此浦にて稚松を取り盆載してもてかへりけるにたちまち祟ありしかば此處にかへしうゑたりとぞ

汐みてばなみもいそほをこし細の浦ふくらむやもげしるらん

中納言持豊

楷木浦 濱三町

藤浦 濱二町餘

比冋魚崎 鰈石あるを以ての名なり

比冋魚石 形似たるを以て名つく

山伏返 島廻の時慢心に長せる族ある時ハ舟に怪あり今この名あるも故あるべし

青海苔浦 沙濱二町



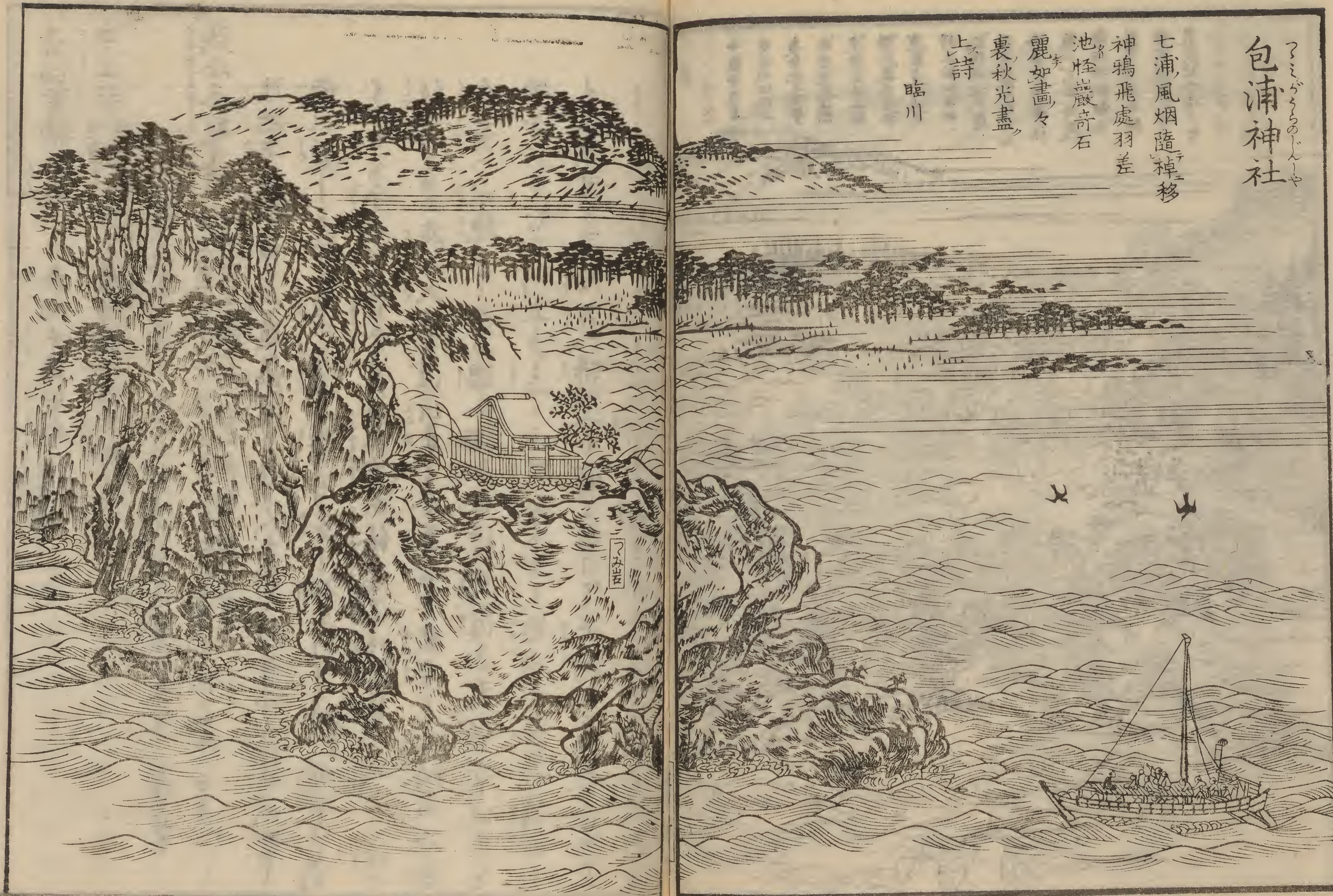
島廻茅輪の圖

杦浦(すぎのうら)神社(じんじゃ)

戯書巌島杉浦神廟壁　石川文山

今茲癸酉季夏仲旬。伴都岐島祭祀之辰。繋舟登岍。使僕問津。独有樵子。腰鎌折薪。地曰杦浦。廟言夷神。且揖且敬。如在如裡。掬滄浪水。薦澗渓蘋。枯松怪石。浄榮墝埆。暫休廟　又歩海濱。徜徉徘徊。離世出塵。食網魚鮮。愛野鹿馴。一遊一楽。鼓枻吟呻。浮雲一点。江湖散人。人謂誰。姓源名轔。




包浦神社（つゝみがうらのじんじや）
七浦風烟隨棹移
神鴉飛處羽差池
怪巖奇石麗如畫
々裏秋光盡上詩
臨川
つゝみ岩

青海苔浦神社　祭神中筒男命　島巡第四の社

牛王社　同浦にあり　祭神猿田彦太神

うけひし次木〻のみより西青海苔の浦の名ある紀伊の杉も一本　中納言持季

陶全姜敗死所　青海苔の浦より西へ山にそうて十三町ばかり高安が原といへる地なり全姜毛利氏の為に破られて當所に遁れ来り終に自殺せり

陰徳太平記に曰く入道は肥太りたる人なれば行歩心に任せず次第に労れ暫しとある處の石上に腰うち掛て休まれける時中間柿並佐渡守ちや日も手に下りけ今日は此山中に紛忍て湯座けへ磯辺に様の泛てけなる夜に入けなば此木に全姜公を載申し山崎殿我等究竟の水練にてける腰に綱を付け更游き更休みて此木を漕ぎ行きなる阿太多島ら小黒髪らまで逃退き其辺の漁舟どもに乗せ奉て防州へ帰るべく様にのりて天河へさく迎りつきぞましてや阿ちら島までは何より易きすにてけといひければ入道聞て佐渡勘解由が水練は吾兼て知る所なり吾もまた冨田川にて幼少の頃ら戯して海河に自由を得ること海神漁士にも勝るべし游ぎ渡て命生んとれもはゞ面〻の力を不惜行きなる島まで渡らんは最やすきことなるべし熟すの様を按ずるに此度不意の戦に負しこと是吾戦の拙にはあらぞされ主君を弑せし八逆罪に當島の大明神冥罰を加へらる所なり然ら上へ迚も遁れぬ此身の死ぬべき途を出海上などにて敵船にあひ止々と討れなんこと一身の恥辱のみら先祖の面伏子孫乃名折なりそのうへ防長芸の士卒三万人を帥て渡り一人も生て帰る者なき形状にしなし入ぞ一人立かりて死たらん者の父子兄弟に何の面目ありて面を對べきや只自害せんより外更に思ひ設けたることなかれといひければ聞人感称の涙を流



鷹巣浦神社
清水調え



腰細浦神社（こしぼそうらのじんじや）



青海苔浦神社乃圖

島巡の時この所まて饗膳ふ青海苔を用ふる事古例なりこれよりて浦の名をつけしはやまことふるくより此名ある事にて好事の者のおもひよせて青海苔の饗をさへはじめしはや

せり牟羅漢謝仲初が術を得ましかバ水面に笠を措き竹葉
に乗て江上をも済るべし黄石真王子喬が道を不学バ構法に
イむ廉雲路に翔る鶴に駕し得るもかなハざる故法人申し二
途にかかるざ洗面し只潔く自害して中有九重の泉路までも供
奉の忠を建べきと心の中いかに涼しからんと思ひ見えるかくて
入道ハ石上に苔を拂て座し乙若が頸に掛たりける袋より胡
餅を取出し自らも喰ひ山崎柿並にもちかれるが法て面
し腰に何までも付ざるやまさ水呑ハ持ざるや最後の杯をべきを
と有けれども不意を討まし合戦なれバ誰一人として用意
したる者もなかりけり其時民部少輔兼康楠の落るを拾ひ松の
葉を以て二三枚写重ね平手の形に作り谷川の水を汲て酒と
号け莞爾と笑ていかに面々聞給へ後漢の道丙ハ故人に遇

ごとに水を酌て酒となせバ人みな酔ことを得たりとかや是ハそれにハひ
熟えて一盃呑てまかな熟浮世の酔を醒させハ功徳水と成べき法ま
バ昨日ハ谷の流を汲て彭祖が菊の露になぞらへて千代もと祈りし
君が齢今ハまた曹源一滴の水に比して手に掬して即身即佛たらん
しえたまへと願ふなれらなしはよと涙にくれて立けるが心で最後の
燕せんとてさしつけつさし頻つしひらきつ呑けるに山崎勘解由法る
バ一曲謡はんとて聲ハいと美しくて五衰滅色の秋なれや落る木
の葉が盃飲酒ハ谷水のなかれにもまかせ淺川水上ハ吾なる物をもの後
もふ時しもハ今を限なりけまと諷ければ入道勘解由ハ観世宗接に
相傳を得て乱舞の堪能世の知る所なりかゝる折しも時節にあひ
せる謡思ひ出しつるを常に龍を嗜その深きを顕そのくら
胸裏に勇といふ字の蟠る故なりと大に感じ其後入道の盃を民

部納れば、とてもはや是しらが承けとて頂戴し水たぶくと受たりけり其時入道いで今ハの旅の首途に一さし舞べしとて腰の刀を抜て差翳し音たからに揚て雑兵の手にかゝらんよりハと思定て腹一文字に搔切て其まゝに修羅道に於ちて乳土となりぬる青海苔山の無跡とひてたびゐへと舞納められけれバ満坐備も只今の舞ハ常よりも殊くまさりて面白くておはゆへ魯陽が戈を執て入日を招きし形勢を学びし舞とやいふべき又ハ項荘が剣を抜て舞しその心沛公にありし勢ひ項羽垓下の破軍に我力山を抜き気世に被ふしも於戯時利あらず威勢摩し労と歌ハれしも唯目の前に見る様なりきとゆへ中にも青野が原を青海苔山と引替させなひくる巧みさかゝる折にハ能思ひ出させ給ゆへ宗接が新宅の祝儀に信濃なる浅まの嶽に立雲のと畑をそこに謡ひへけひしをさそ奇特の発明に申候へハ唯今の一字千金の御作意に天地の勝劣まではと一同に感称せりけり金姜石上に座し辞世の歌に

何をかもみなをを恨みんもとよりも此ごろまゝの定なる身に

と詠ぜたりけれバ満坐感涙を流さかゝれハまた山崎勘解由隆方

なりときゝなりと只ふも迷ひなるまよひなんれハ悟さへなき

柿並佐渡守房精

莫論勝敗迹人我暫時情一物不生地山寒海水清

伊香賀民部大輔隆正

たもちゑやお年をつけし山松の朽ぬる時を君に見んとハ

と思ひの志を吐られハ入道面々飛鳥井の餘流を汲て殊に好みの達者なれバ心詞目頃に十倍して覚えたり佐渡守が人我悟を放擲をる意趣最後の善知識なりと甚感歎しけて金姜若楓といふ脇指



陶全姜敗死乃啚

をうちの腰へ案立矢をへ颯と引囬し曳やつと声をかけまさ取直し
心本にぐつと押立下へすと押下し腸活と出られハ手を以て掴ミ出
さんとせらるゝ所を伊香賀民部少輔見るより遊ばしゆといひも不敢
太刀振上ると見へしが首ハ前に落ちける中略民部ハなちかゞり入道の着
られつる袖に首を包ミ杳かに隔て谷川の岸根に重りたる岩の下へ
押こみ供に在りる者共石を畳ミ木葉をうけてぞ隠しける扨て山崎
柿並両人阿僧祇劫までも断金朋友の盟ハかはらじど互に手に手
を執て太刀を心本に刺立て二人貫き合て死たりけるが其の外佐ま
したる士巳人も同じく刺ちがへて伏たりけり民部是を見て何も剛なる
死様を入道殿の剛なれバ家子郎等もまた勇なりと感じ中略
さて吾身ハ二三町許浜辺へ走り出立ながら腸をさやがりてつらぬきび
押切て倒れ死たりけり民部がふるまひ勇なり義なり忠なり謙あ

りと感称せぬハ無りけり其後陶入道の首元就父子巳人実検ありて
廿日市の黄龍山洞雲寺に納め石塔立置懇懃に孝養せられけり

閼伽末　弥山の閼伽水此処に流れ出つ此あたりに讃岐の浦といへる地名ありとのへとも所さだかならず

養父崎　林木生茂り嵓石峙立て浪あらし七浦の第一なり

養父崎神社　祭神霊鳥　島廻の時此処まで烏喰の式なり

凡島巡の禊とらふハ島中の七浦の神社を巡拝することなりこれ三
神この島に降臨ましく御座所の地を定めんとて浦々を見
めぐらせたまひし故事によれるとかやその式ハ願主吉辰を撰び
前日より潔斎をなし當日の未明大宮神前御笠浜より船
に乗る祠官の船にハ四手切かけ賢木を立て先に進む願主ハ真梶
しげぬきる船に幕など引旗水主十二人にて是を帆にかけ御崎
乃松も栄ゆくなと謡ひ立て漕出次養の船にハ宿のなるし以下


養父崎神社
やぶさきの じんじゃ
ヌワ
ツワ

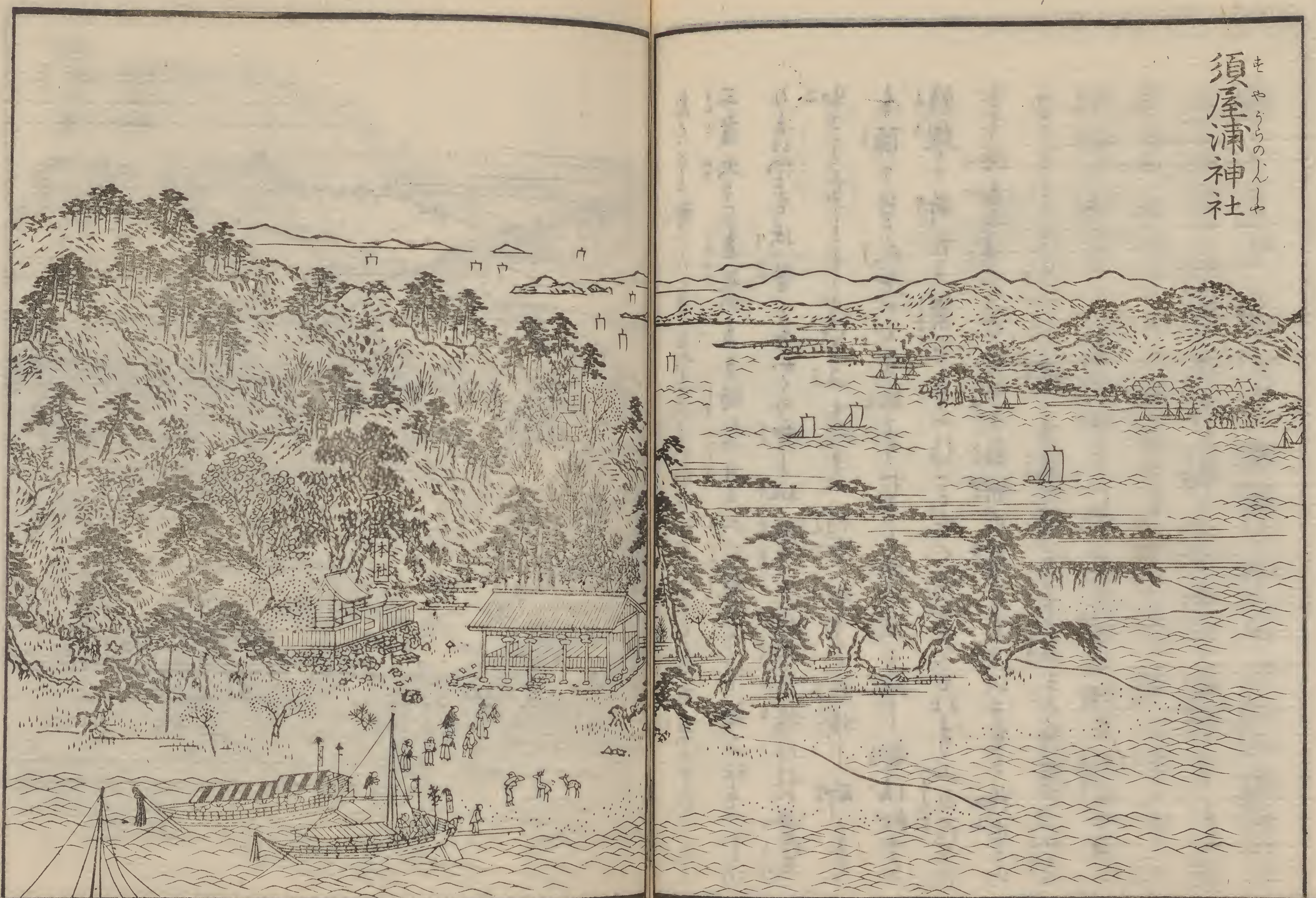
山白濱神社（やましろはまのじんじゃ）

をとめ子が
いつきまつれ
るみつ垣の
久しき
ほど毎
しるき
松かげ

村田春門



乗れり都合船三艘佛山を右になし廻るまづ杦の浦に着て各修禊し社頭に拝謁を祠官社前に楽を奏し退出のときにいたりて拝殿の濱に茅の輪をたてくゞりて祓をなす次以下浦々その式異なることなし但杦の浦にては別に朝餉の式ありて膳部質朴なりそれより頓て船を出し鷹巣腰細の浦をすぎ青海苔の浦にいたる此處にて手饌を調ふ飯上に青海苔を粉にしてかくること例なりはてその式をはりてまた舟を漕出し養父崎につくこの地渺濱もなく岩石かさなりてうちよする波いと清く松の木茂るに朱の玉垣うえさせたまふ祠官ふなばたにたち出粢を海上にうかべ島向楽を奏すれバたちまちに霊烏一雙嶺よりとび来り祠官の船に移り波にうかぶる粢を雄烏まづとりてのぐ次に雌烏また下りてのぐ其時前後の船舷を叩き歓の声を発してどよめくこと暫しハなりもやまず少しばかりありてまた雄烏来りてのぐ凡て三度大かた島巡の多き時ハ一日に二三艘より十艘におよぶことありといへども次第みなかくの如し但船中に不浄汚穢あれバ霊烏出ることなしもし出る事もおそきれバ祠官船中を點検し聊かにても障りある人をバみな船よりおろし跡の濱に残し其後船中を修禊し新たに粢をうかぶればことなくのぐるとぞそれより山白濱をすぎて鰐屋の浦にいたる宿主餡餅の饗をなす次いふなる所由といふことをしらず其所を過て御床の浦にいたる各また修禊し石上の拝殿に蹲踞をし祠官祝詞をよみて茅の輪を納め大元の浦に漕着け各船より下り神拝をなして後宴の席を開く果て大宮容神宮に報賽の神楽を奏る以上島巡の梗概なり凡浦巡といふてもありこれハ伴せる潔斎なくもせず只山水逍遥のた


須屋浦神社
すやうらのじんじや
午王
本社



御床浦神社



須屋浦にて餡餅の饗を行ふ圖

あれなり

霊鳥の事は巻大頭大明神の件にいふべし

島めぐりの歌をよめる

なみ浦の島めぐり漕ぐ舟の中に聞ものゝ音はみな波枕やきくらん　中納言持季

いつまでも見る人もなしいつしまめぐる浦回を面白げにして　似雲

山白濱　西濱三町この処に菓子盆石と云ふ形似たるを以て名つけたり

山白濱神社　祭神表津少童命の社　島巡第五

かしこしな名さへうつろはぬ山しろの濱辺にしづまる神の宮居を　中納言持豊

華籠崎　同浦の崖辺にあり

早咲櫻　同所にあり睦月の末既に花開て香色ことに愛すべし

桃木浦　濱二町入江あり

棟木浦　上に出なし

江浦　上に出なし

下り松浦　濱一町半入江にあり此浦に烏帽子岩といふ所あり形似たる由にて名とす

阿多太島　同所の沖手にあり山上に明神の祠を置けり

さ行舟は日東のうら出ておるやまの崎といつくしまのあひ二十町ばかりへだてゝおる中に小じまのさとくしげる ひとつ島これあれ小黒じまとなるべしこの島のかたりをかてとぞいふなる

しまもりにいさゝかいんたがためなれあてゝと名づけおひけん　源貞世

そのゝちなみにあらむしまゝかりまはりのせとぞ中な

長浦　西濱三町半

須屋浦　或ハ西屋に作る　西も濱五町

須屋浦神社　祭神表筒男命の社　島巡第六

牛王社　同浦にあり

祭神猿田彦大神


實定卿の御前ニおいて有子内侍琵琶を弾く圖
体源抄曰 殿上ニ其駒ハ知なる人多分なしと云 六波羅太政入道厳島の内侍ニつたふべきよし宗家々ニ示されそれぞ歎ながら世ニ従ふならひカおよぐを秘説をつたへられけり 但他人ニ教ふへからざるよし起請をぞかゝせられける 下略
たえぬ絃き ち起り毎 しるてよつの絃ニむすぶべし ことの音こそなかれ
田中芳樹
芳園

須磨清水　須磨浦より流れ出る澗水なり 来往の旅船これを汲みて海路の用水とす

浦ちかく汐屋の網を乾すまにて見る名に波そたくひなりけり　中納言持季

新贄浦　渓一町半

猪子坂

須磨浦

須磨浦神社　神殿石上に建たり　祭神市杵島姫命の社　島巡寺七

相伝へていはく此浦は本社の神天降らせたまひし時の真床即ちいちのとなりし所なりとぞ

あふけなき天くだりましく玉がきの須磨のいそわうてきなきかけ　中納言持季

牛王社　同浦にあり此社のあたりに烏帽子岩あり　祭神猿田彦大神

大川浦　渓一町

大江浦　入江あり 鰐口岩といふ此浦にあり 形似たるをもて名とす

貝売塚　大江の浦の渓もとにあり十三町ばかりの山間に二丈余の窟あり其下貝売多し 弘治年中陶晴賢の時残卒この處に遁れ来り磯辺の貝をひろひ躬日しのび居しとぞ

内侍岩　同所にあり 伝へいふ徳大寺左大将実定はいまだ大納言たりし時厳島へ下向ありて島の内侍有子といへるを愛したまひしに帰京の時此處にきたり別を悲歎せしによりて此名ありといふ 平家物語盛衰記等の説によるときは内侍はみな実定に従ひて都へのぼりしとも見えざる 今按ずるに自余の内侍は上りつるとも有子は故ありてとどまりし故にこのかなしみはありけるにや 後思慕のあまり舟に乗りゆきて住吉の沖にて入水しける

源平盛衰記曰 内侍の中に有子といふ者あり十六七にもやなるらん年少く幼稚て常もまみらせざりし見来るが希代の琵琶の上手なりけるやらなる事がらもいと勿しき顔だち故にも忘れぬべしと実定常に仰られしが或時有子とく来て唯一人御前にさぶらひけるをこが身は此国の者かと御尋ありけれども顔うちあかめて御返事もまうさず愧かしげなる有様いとど由ありて御覧じけれは実定思召入たる御気色にて畳紙に御手ずさみありて有子が前へなげさせたまへる

山のはにかたぶきて出んよはの月めぐり逢べき折もしらねど

有子内侍はこの手ずさみを給て堪ず思ひしめさるけしきにて御前

をばたちぬ実定はたゞ尋常の情に思召るゝを内侍はしのびがたく

ぞおもひしづみけるはても七日過ぬれば都へかへり上りたまふ内侍ど

も御送りにぞ参りける有子はたへぬなごりなしにて上りたまひなん後は

よそにても争か見奉らんとて衣引かづきて臥まろび内侍とも一夜

の泊まで御供申て其夜は殊に名残を惜しみたてまつり明ぬれば

暇申さるを実定宣ひけるは餘波は尋常ならぬひなかりこれは理に

も過ぎたり何かはくるしかるべき都までつれゆけまゐらすもよし

また見参もいつかはとおぼえて何か身思ひのこすもとなきぞと仰られ

ければ内侍どもさらぬだに思ひがたきなごりにかくこまごまと宣ひける

は都までと送り奉りける 中畧 偖も有子の内侍は徳大寺の何とな

き言の葉を得て思目くにぞまはりけるに千早振神に祈をかくれどもそ

のかひなかなふべきにあらず絲が浮世につきなく何きはこ我らの悲思ひの

たきてと毋なきに千尋の底に沈なばやと思ひて艜舟に便船して行

し人のこひしさに都ちかきところにて兎も角もならんとて波のうへに

漂ひけるせんでのゝと哀なり船の中に慰には琵琶の曲を

弾ける調弾数曲をつくせば聲は松の風にやかよふらん旧絃緩急にか

き乱せば響波の音にも紛ひけりかの白楽天潯陽江の口に流されて

舟の中に琵琶を弾ずる音を聞けば錚々然として京都のこゑなり

り故郷のこひしさにその人を尋ぬれば我は長安の娼家の女なり十

三にして琵琶を学び得て名は教坊第一部にはしられども顔

色朝暮におとろへて老大にして商人の婦となれり夫は利を重

んじて他にゆけば我は獨なげきなき舩を守て波のうへに浮ふとい

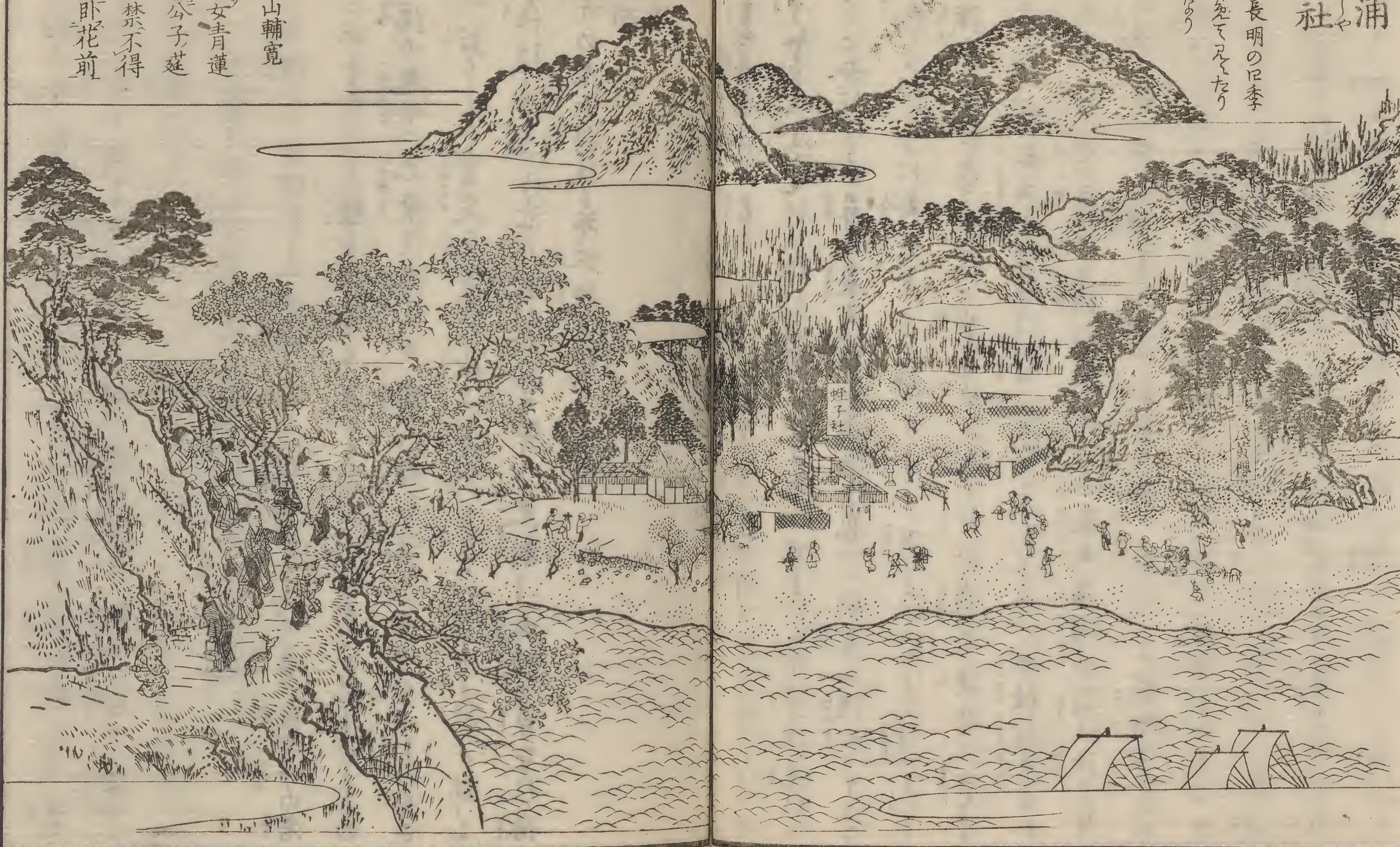
網の浦 蛭子社

浅黄櫻ハ長明の四季物語にもしるし見えたり あるたぐひのものなり

醉妓

鳥山輔寛

酒豪自喚女青蓮
日日倍歡公子莚
春酔有時禁不得
琵琶當枕卧花前



ひながら琵琶を抱て面をはしかくしけん古も思ひ出られて哀
まなり有子終に摂津国住吉の澪の沖まで船にて立出て海上をは
るかに見渡して

　　ちかなしや浪の下にもいらせ給へし月の都の人や見る迹

とうち詠てしのびやかに念仏申て海中へぞしづみける舟の中の者
どもあさましやと騒ぎけれどもまたもみえざりければちからなしこの
潯陽の老女は色衰て商人に随て舟を守るこのいにしへの有子
は年若くして実定をこひて水にぞしづみけるいつしかこの事都に
披露ありければみな人あはれとおもひけり見馴し内侍が事なれば徳
大寺の左大将はなはだ不便におぼしけり

室濱　海濱

鵜泊　同町

蹈鞴濵　海濱二丁余往昔平宗盛弥山寺附の洪鐘を此處にて鑄しといふ一名は語の濱ともいふ

鱠浦　濱半　この浦に鬼岩大黒岩梶石といふ三つの名石ありみな形の似たる故に名とす

江浦　海濱　一丁

網浦　海濱一町半　樹多し此浦より大元へかよふ路あり

蛭子社　同所にあり

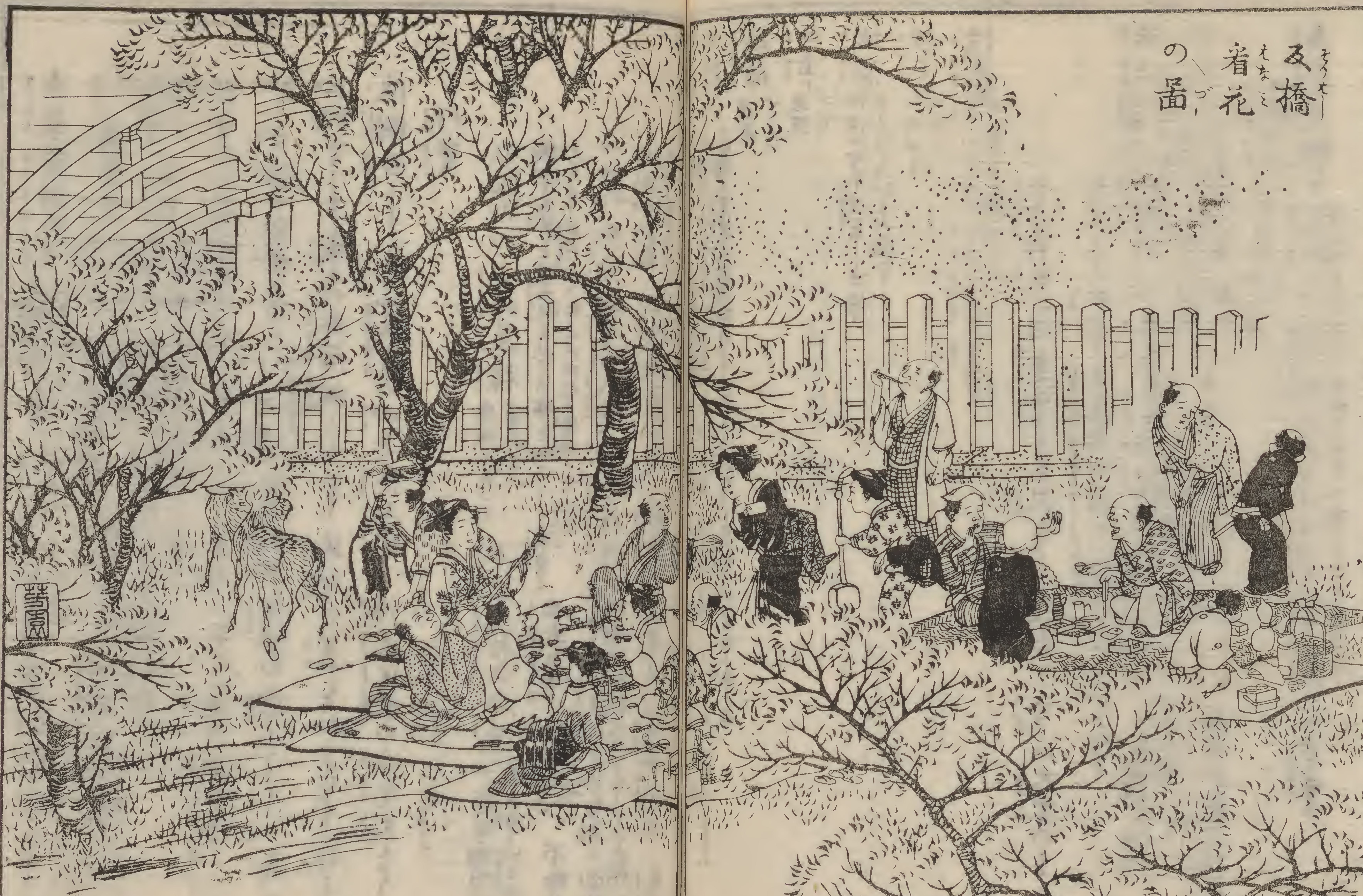
淺葱櫻　[illegible]にあり白花水色を帯たり[illegible]に奇木なり

以上島巡の次第によりて記せしところなり以下は大宮のうしろより起りて大元南町西町瀧町などにをはる

預坊　宝庫の上の山の林中にあり社僧なり冥基未詳　本尊不動　御長五寸一分弘法大師の作○この余櫨木坊大聖坊正覚坊等の社僧寺ありしかども今廃してなし

宝泉院　南町にあり南照山松壽寺と号す京師仁和寺に属す　本尊十一面観音　御長一尺六寸弘法大師の作　脇士不動毘沙門各御長一尺三寸　作詳ならず　冥基詳ならず

亀居山大願寺　大西町にあり放光院と号す京師嵯峨大覚寺末派なり古文書に本願寺とあり今も本杁大願寺と称せるはこの謂なるべし



反橋看花の圖

本尊薬師如来 座像御長一尺五寸 弘法大師の作 脇士不動 立像御長一尺五寸同作 毘沙門天 立像御長同寸作詳ならず

護摩堂 境内にあり本尊如意輪観音 御長一尺五寸 行基の作

鎮守住吉大明神社 境内にありて元亀二年吉田兼右卜部下向の時勧請せる所なり

老松 庭前にあり幹の圍ミ凡五抱高さ五丈余老鱗数百年のものなり伝へいふ小松内府重盛の植ゑしとて径ちありと

当寺の開基年歴久遠にして考ふべからず今は三十一世の祖了海上人を以て中興の開祖とせり了海は建仁のころの人世々大宮修理の掌として一島乃巨刹なりき庭には松風颯々として迷暗の夢をおどろかし前には波瀾渺々として囂塵の心を洗ふ実に清遠幽寂の古梵字なり

什宝

弘法大師自作尊像 座像御長一尺八寸厨子入 護摩修法のとき其灰を以て此像を作るよし裏書ありしが年月日も記してはあれど磨滅して不詳

弁財天十六神像 弘法大師相州江の島に於て一万座の護摩修法の時の作

五大尊一幅 大師の染翰 不動尊一幅 同上

弥陀名号 同上 八景野立屏風 尊海上人大蔵経を得んが為に渡韓の時請ひ得て携へられしといふ 雪舟の筆なり

古法眼画屏風 雅楽助画屏風 雪舟蓮画 亀居

其縮図と宝物の巻に載せたり

山記 寛文の頃の当職以空大僧正時の帝へ奏請し得る所の宸翰なり院主の外みだりに見ることを禁ず

此余鎌倉のころ将軍家北條家などよりの書翰等数多あれども煩はしければ略しつ

大蔵坊 大願寺のうちにあり同寺の末院 開基詳らかならず 本尊不動 御長一尺 弘法大師の作

泉光院 中西町にありこれも大願寺の子院なり開基不詳 本尊阿弥陀 御長一尺五寸 作詳らかならず 鎮守金比羅社 寺内にあり

大元浦 本社の西南にして或は竹原浦ともいふこの浦に牛石とて名石あり形似たる故に名とす

この辺泉石幽邃の地なりまた大木の櫻数株ありて妖艶たる花盛には花下に遊宴を催して春を惜むの客少からず前渓には白條魚を産すその味他境に異なり

大元社 同所にあり

祭神国常立尊 大山祇神 合殿佐伯鞍職

末社

大国主神 八幡宮


大願寺
だいぐわんじ
護摩堂
住吉
金比羅



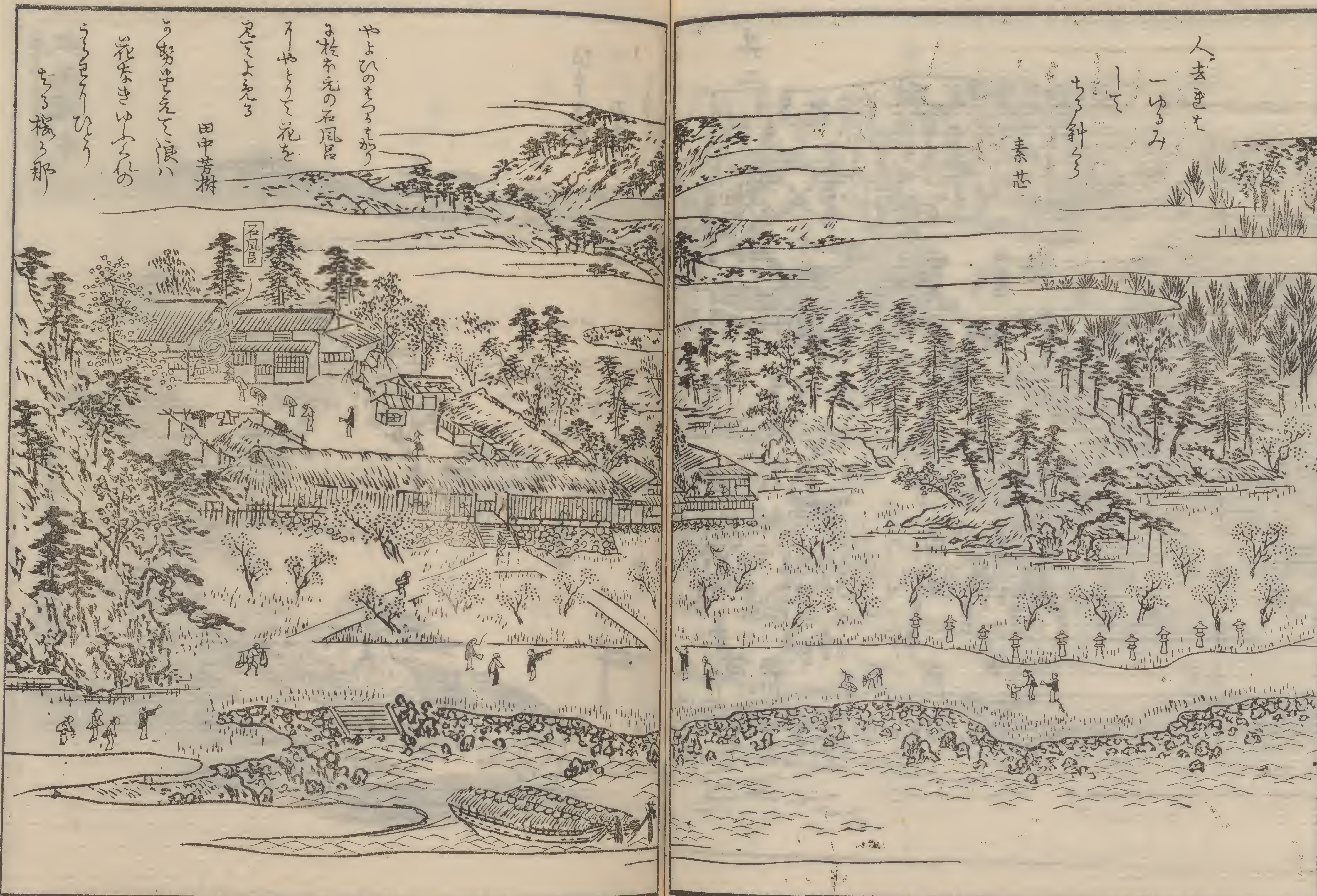
この余二字の小祠あり祭神不傳をうしなへり
陰徳太平記曰其程へて和智隆實いづれもひらん神前ニ取籠焼草を取込ミ討手来らハ當社を焼拂ひんと巧ミたり茲によりて元就朝臣より近習ニ召仕へまゐる熊谷右衛門尉ニ嚴島へまゐる和智討果すべしと謀の栢躰いひ含めたる熊谷やがて彼地へ渡り神前の廻廊よりしのび入和智右衛門尉が内外へ出入するを伺ひ直ちのかゝりて無手とくむ熊谷大力なれば些も働かさず廻廊まで引出して元就朝臣の上意の趣いひ聞せ刺殺したり和智も住る勇士なれバかくやさしく討るべきニ非ざれども寶殿を焼んとせし悪逆により神罰を立所ニ蒙り云甲斐なく討れ當世の武名を朽させしのミならず未来ハ八大地獄ニ沈淪して獄卒の鉄棒を喫し永くの苦患遁るる期あるべからず次舎弟湯谷又八久豊ハ理をつくして宥免ありしバ頓て

大元神社（おおもとのじんじゃ）

櫻　　茶山

西土偽王原姓姚。天香國色專驕傲。一從歸化拜櫻花。羞愧曾來稱僭號。




人去きを
一ゆるみ
して
ちる斜ら
素芯
やよひのきつるをかり
子杉本元の石風呂
て入やとりて花を
見てよ見る
田中芳樹
この影とえて浪い
花なきゆふくれの
うらむらりひとり
ちる桜ろ那
石風呂

大元櫻花（おおもとのさくらばな）

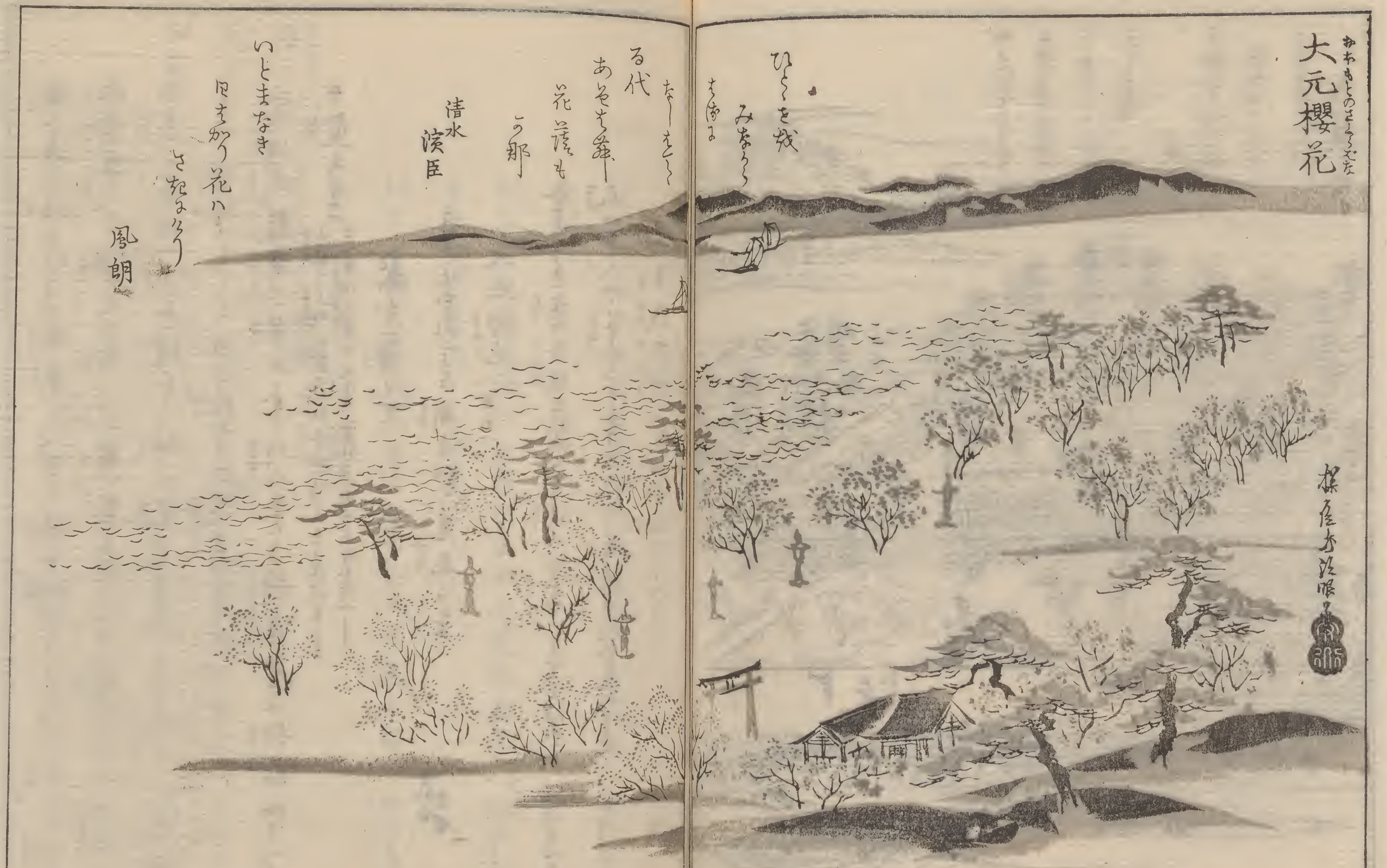
ひらくを我
みなもと
ちるる

なしまとく
る代
あそちも舞
花なきも
この邦

清水濱臣

いとまなき
日まかり花ハ
さかまくり

風朗



頭を延て切られけり郎等三人をも頭を刎てけりかくて和智兄弟の怨霊諸人を悩しける間この比島の者どもこれを宥んがため大本の社の辺に叢祠一宇を建立し神と崇るとなんこの度宝殿觸穢によりて当社ことごとく作り改められ遷宮の為吉田兼見卿下向したまひて其儀式厳重丁寧にとり行はれける神慮いかに歓喜なるべきとぞ覚えける

今按に上件不載の二社祭神はさだかならざればもしくはこの豊は久豆の兄弟の霊社にはあらじかなほ考ふべし

たれもとの浦まで
うらとほみよる舟まねく尾花かな　月村斎 宗碩

大元桜花　八景の一

みまほしき花の下陰これもまた神のいさめやこえてとはまし　冷泉亜相為久

ころなる人やたむけるをへてちらそしげきたれもとのまや　宣阿

この貴賤不浄にまじはや山ざくら　野坡

たれもとやまむも見るもさくら　風律

祠在仙山蒼波浜。白桜相映満階春。雲蒸霞散常彷彿。一段風流仰此神。　従二位韶光

何年移植漢家種。凝雪興雲万樹奇。果熟廟前吾要用。黄鶯他日莫相窺。　黄檗僧岱峯

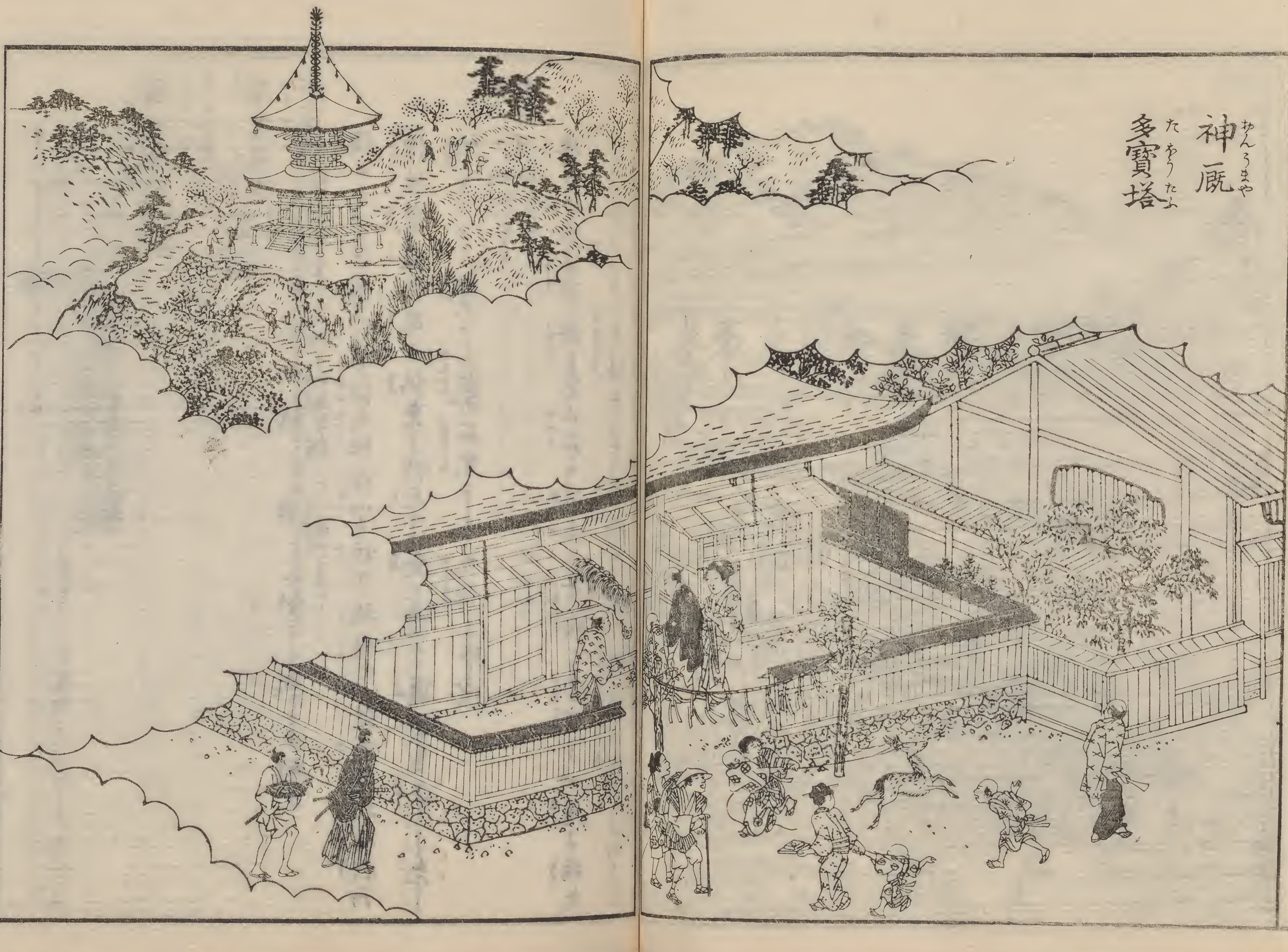
社下白桜交影深。濃雲浓靄共森々。三春花事無多日。坐愛千金一刻陰。　北村篤所

橘山　大元の上の山をいふ此山に山姥の飯燧石といふ有り名義詳ならず

道祖神社　月山路にあり一に幸神社といふ

あ努山　本社の谷にあり茅屋数軒を設く島内の婦人月経のときはこゝに移りまづ此所に避け日ひをおくりう然るまゝのこゝより十日せりの居の者の避場となりそもくこの島の例として死穢ある者は地方に避ることなく其居所は冥慮を蔑如したてまつるに似たり但し日居の者は今も古の外に居て七十五日にみちてこの地よりその余日を経へて後家にかへる古には神地のしるしありまた産穢も死穢に同じ子のまだ生まれんと為るにいたりて地方に出居七十あるをへて家にかへる但し死穢は七十五日まで島にはかへれども前にいへるごとく地方にあり


經尾
地藏院
十王堂
十王堂
地藏院


神廐
多寳塔

家に入ざるを以て産穢よりも重きを知べし かくてその百日に満たる日を産のうてまではもとくらといふこの日よりう
まれし子の名をつくるなりこの日まではチンコとのみ呼びて名はなし これ厳島に限れる事なり今按ずるに
山ハ血山なるべし 延喜斎宮式 延暦儀式帳等の忌詞に
は血をあせといへり 一説に悪山など云へる杜撰なり

廢仙藏坊 あせ山の ふもとにあり

十王堂 同所に

廢真珠院 本社の北の谷にあり

石風爐 同所にあり 石をたゝみ室を作る 廣さ六七尺高さ一丈余 藻をしき潮をそゝぎ病ある
者こゝに入て座すれば頓に宿疾を愈しむ 功験世に名高かりし

傳云もとこの風呂ハ弘法大師弥山に於て修法のとき求聞持修行の
僧徒嵐湿の気に悩めるを見て是をつくり湿気を去らしめし
所なりとぞ 實に千載の石室にして凡作にあらず

經の尾 大元へ行道にあり

傳云平の清盛許多の小石に法花の首題を書寫し此處に納め
しと云今も一石塔ありて其処より經石を出すことありま
くたとの地の草木ハ枯槁せしものといへども采樵すれば祟ありといふ
いかなる所由ありて然るやしられず

西町 本社より西の惣称にしてその内 收町にわかる 大西町 神馬屋町 中西町 久保町 中江町 瀧町等なり 南町もこれに属す

神厩 神厩町にあり本殿の神馬をつなぎたり

むかしより鹿毛栗毛などの異毛の馬を献ずといへども次第に毛を
かへて二三年の間に白馬となる もとより神馬にのみ用ふれハ常ハ厩に
繫でおかず この外にハ島内かつて馬をかはし来ざるに 島人時として
馬沓を拾ふことあり 俗傳に御神これに御して深夜微行し給ふ故なり
といへり 田中秀年が緑陰漫筆に云 白ハ皇国の貴色なり 毎年の正月
七日に行はるゝ白馬節会も内裏式に左右馬寮各牽青馬入自
延政門 延喜左馬寮式に凡青馬二十疋 自十一月一日至正月七
日二寮半分飼之 とありて その訓をも安乎宇麻とつけことに萬

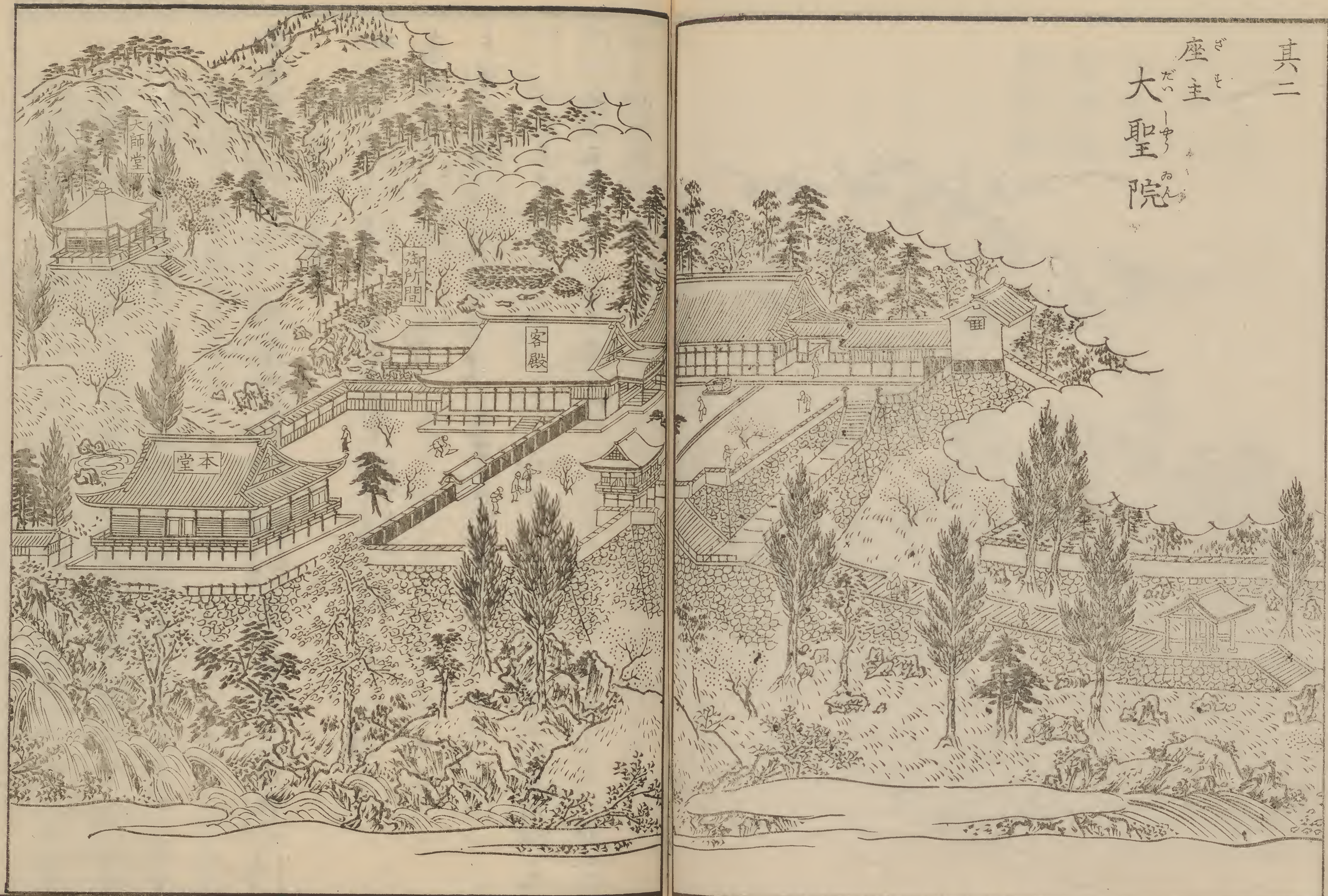

紅葉谷(もみぢたに)
以中庵(いちゅうあん)
尼宮(しのみや)
尼の宮
以中庵
地蔵
行きやらぬそゑしんのしるびをもとりてぞしのぶもみぢ葉れと
本居大平


紅葉谷納涼

葉集巻二十に水鳥能可毛能羽能伊呂乃青馬乎家布美流比等波可藝利奈之等伊布などゝさへよめれど加茂真淵の説に家持卿のうたも鴨のはのごとく青き毛いろのうまといふ事はあるべからずうまは白きうまにてとなれば青といふ詞の序に初二の句はおけるのみとある如くにて実は青と白と言葉をかよはしもちふるにてある故に白馬を青馬ともいへるなりけるは河海抄に十節録云正月七日看青馬青以白為本天有白龍地有白馬是日見白馬即年中邪氣遠去不来また兼盛集にふる雪にいろもかはらでひくものをたが青うまとなづけそめけん土佐日記に七日になりぬおなじみなとにありけふはあをうまをおもへどかひなしたゞ波のしろきのみぞ見ゆるとあるなどその證にあるべしまた日本紀神武巻に青雲白肩津とあるはしらくものしらかたといふ事なるを青と白とかよはせし例なれこのくらべけ源氏物語夕顔の巻にはごまなどもいとしろうとかけるは青き言葉を白うといへるなどもおもふべし嚴島社の神馬鹿毛を献りても栗毛を奉りてもみな白毛にかゝるぞくすしき神の御心より起れることにこそそもそも白質のもの殊に尊ふことは馬のみにあらず服色なども然り衣服令に白葈丹とつゝ称て集解の釈に我朝以白色為貴色天皇服也といひ日本紀略に弘仁十一年正月甲戌朔詔曰其服色大小神事及季冬奉幣諸陵則帛衣と載て帛衣はやがて白色の衣なり餝抄に帛御装束着御事御大内之時一度召陵御装束とあるを一本には白御装束とあるにて知べしかく七日の御馬ゝつ御服のたぐひもみな白なるを以てこの社の神馬の異毛もうまるゝ次白毛になるをまたく神の御心なれば奇しきに似てあやしきにはあらざるなり漢土はこれがうらうへにて酉陽雑俎前集十七に成式脩竹里私第園数畝壬戌年



社僧
菩提院
愛染院
増福坊
龍燈院
瀧本坊



其二 座主大聖院

有蜂如麻子。蜂、膠土為窠於庭前簷、大如鶏卵、色正白可愛。家弟悪而壊之。其冬果釁鐘手足。宋史言宋明帝悪言白。金樓子言子婿日疾風雪下幃幕変白、以為不祥。柳知俗忌白久矣といへる和漢のためし雲泥なるを知べしといへり

華藏院　神廐町にあり社僧なり　開基詳らかならず　本尊阿弥陀　座像佛長一尺八寸　作詳らかならず　脇士弥勒十一面観音　両尊ともに座像佛長八寸○京都仁和寺に属せり

地藏院　同町にあり社僧なり　開基詳らかならず　本尊阿弥陀　佛長一尺五寸　作詳らかならず

廢蓮乗坊　大西町のうしろにありて大願寺の子院なりしといふ　本尊薬師如来　行基の作

多寳塔　中西町岡上に建てり　方二間半余　高さ八間余二層なり

大永三年癸未六月おもひ立て建立せりといふ。その後宝永三年丙戌に九輪の再興ありき。銘に厳島佛大工野阪左兵衛尉公春　同太郎作雅春　同小工豊嶋谷次郎　冶工藝陽佐西郡廿日市住山田氏貞能とあり

廢多寳院　多宝塔のかたはらにありもと塔の本寺なりしとぞ

陶全姜陣所　多宝塔なり毛利氏と合戦の時陶まづ此所に陣をとりしとぞ

行宮趾　高倉帝御幸の跡にして即今の久保町竹林内侍が宅のほとりなりといふもとこの内侍ハ宮武内侍といへりこのいへの内侍平相國に愛せられて女子を儲しこと平家物語に見えたり

高倉天皇御幸記にいはく宮じまの南のかた三げんに西の御所つくりて障子の絵ども海のかたちかきたるやうにみのへなぎはまで廊どもつくりつけて後ろにはただ御舟をはしよせんまでをつくりたる云々

大湯屋跡　往昔南町にありて社家供僧潔斎の浴室なりし故ありて廢しぬその後また瀧町西方院のうへの山に再興ありしがこれも廢しぬ

俗傳にこの風呂再興の後たまたま湯を商へる者来りて浴せんことを請ひしに素より凡俗の入ることをば禁ぜしかば浴室守拒へて許さざりし翌その者ひまをぬすみて入りぬ果して神霊の威験たちどころに顕はれて砌に植る欅樟中より折れて倒れ屋梁も摧けそのいりたりし者

うち殺されたりこれよりこの風呂もまた後に廃しぬとぞ今大願寺の境内に一の鉄釜を遺せり経三尺七寸深さ二尺七寸また風呂の横立石といふあり 石といひ伝へたれど鉄にてつくれるものなり 横石には平清盛の三字竪石には厳島大風爐再興 大江元就朝臣同隆元 脇書に藤原元春平隆景永禄七年三月吉日一面に厳島大願寺圓海上人建立 脇書棚守房顕客人棚守親尊と銘せり共に大願寺にあり

南風爐址 これも南町にありしを以て南風呂と呼むかしは貴賤をきらはず沐浴せりとぞ

總て當島は山勢嵯峨たるを以て清泉多し家ごとに筧を以て是をうけつぎ偏に擔汲の煩ひなし中にもこの南町にながるゝみづは二丈余の船にたゝへ殊が中に清潔にして病痾をまぬかれしとぞ宝暦のころより廃せりといふはあたらしきことなり

廃瑞光寺 南町にありし

紅葉谷 南町の奥にありこゝに獅子岩とて名石あり

幽邃清泉にして澗水の音のゝ潺々として石上を奔れり岸の両邊には楓樹多く秋されば紅錦を曝すが如し所の名實にそむかず三伏の炎暑には青葉が蔭に假庇を設け茶を煮餅をつらねて涼客を饗すも一區の勝地なり

四宮 紅葉谷にあり

以中庵 同所にあり光明院の抱地

若宮原 同所の奥三丁ばかりにして一區の原あり清浄の地なりもと此所を若宮とよべるは若宮と号す祠宇のむかしありしなるべし

瀧山水精寺大聖院 弥山の麓にあり真言宗天正中京都仁和寺に属せり

本尊不動 弘法作 辨才天女 同じ 上に

門 秋葉大権現住吉大明神園中にあり

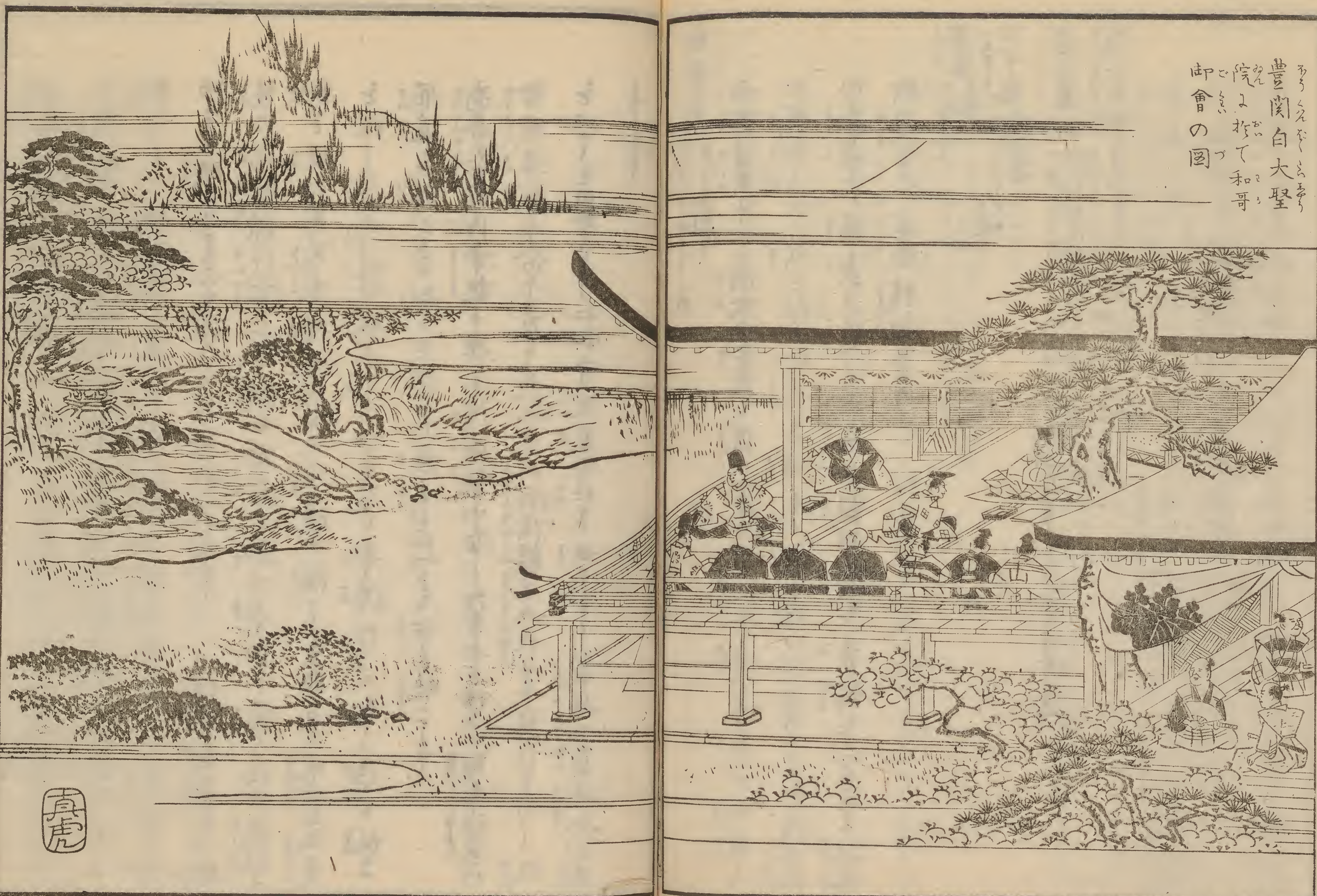
天 鎮守二宇

客殿 中尊弥勒脇士弘法大師毘沙門天

護摩堂 中尊不動明王 脇士弁才天毘沙門

正月九日連歌會 當院に於て神人供僧相集て連歌始を行ふ

當院は本宮の別當職にして世にこれを座主と称す中興は日輪上人



豊関白大堅院に於て和哥御會の図

法器の聞えたる碩学匠にておはしましき康正二年に武田國信佐西郡の神領を攻し日神官僧侶廿日市の櫻尾の城に楯籠り防き戦ひしに寇火城に羅りて書記多く焼失ぬされども灰燼の餘にわづか残れるものもありしに天正二十三年　後奈良天皇の勅諚の為記録什宝を一船に取集を都へ上らしに當りける暴風に船を破られ文書僧俗ともに魚腹に満しぬ　かく水火の両災を経しかバ典故の照しみるべきなく寺傳たしかならざるが故に宥基も詳らかに知りがたし又座主といへるも古き称にして高倉天皇の御幸記に座主阿闍梨になしたまふとあるは即ち治承の當職尊叡上人のことなり天正中仁助法親王止住せさせたまひし故をもてそのかみより仁和寺院家の任を世々にし承仕二員使令に供するなり

什寶

両部曼陀羅　弘法大師の筆なり下同じ　五大尊　六字名号　合躰不動愛染　弘法

大師御影　真如親王の御筆　佛画

當院ハ林泉深雅にして頗る丘壑の情を養へり　豊臣関白御参詣のとき和歌の御會ありき下に載たるを見るべし

むかしよりならしなれぬいつしまハ見せばやと思ふ雲のうへびと　松

そのかみも及ばぬ春の海山をときみがながめとなして行くらん　義延朝臣

滝の紅の岩根の花を根ざしにて千代もくまなん瀧のしら波　信張朝臣

後まもや八重もおよばじ宮しまの浦と山とを床のくしき色　頼隆朝臣

わきもひき風のまゝによりきて散り残りたる花をとみんとは　秀康朝臣

たちよりし君も今又山桜さくなもや君が代をあふぐらん　瑞甫

山くのもゝのひまのまちてくる花をあらぬとの見あるしるなみ　玄熙

わたよりくこのしま山を見てこれが宮居名だゝき春のうなづら　法印定加

かゝるよ舟人やはつくはんなかくふるのしま山のたかのうしき紙　釈全宗

みやこまて見えしは物のかずならずこの浦やまの春のけしきは　法眼瑞慶

くもとものいらでとゞく舞鳥山のたかくなきにいるめまのうなづら　禅高

うちわたすこのしま山の花ならで花にあらぬ浪乃海面　長吉

名もたかき浦の宮居に来てみれぞ詠をば残す山さくらかな　盛月

浦やまのなが来ることなる春の日になかくしても落る瀧波　忠重

なにはえてこのしま山に見てみれば波にかゝる瀧のしら糸　正房

神代よりちぎりし松のみどり波は下ゆく水もさやはたゝまし　賢家

わたよりくこのいしほをながむればなにはもしろき春のうら山　勝隆

行舟もきみがみ由縁のちり敷えて波もしつかさ此の宮嶋　長盛

春ごとのころしもなべぬ山さくらよも匂がし海のこちふきかせ　三成

見わたせば花さきつゞくあたりのやまなみくるゝしま山　勝利

ちりかゝりてさくやさくらの花さかりいろもこ松もふかき嶋山　宗澄

花のころきみがみゆきの折をえてこのしま山の名こそたかけれ　吉種

都人になかめられてしま山の花のいろ香も名に聞えけり　吉徳

名に知しみや嶋山のほとりかな詠めもふかき春の夕ぐれ　相阿

名もたかき宮居をちにきてみればちよのゝち名のたまつしま波　太一坊

知しよりみてこそまされしま山のかげにつく船のつばさく　体愛

いつの春たねをうゑけんしま山の松はこけむもいくとせふるらん　祐栄

瀧つ瀬の花にんもうちとけてうつるけしきなみの早瀬　國重

宮しまの緑を海のうしきは君が代この世ふらぬと見え花もしるらん　正家

うら山をうけても波来る宮居の名だゝきなる春のゆふ暮　正勝

みや嶋のゆきやこのまちをまつらん名ひとしほの花のゝるもい　之長

花のちる陰ゆきかふや扇来てこれがなたひとしほの月の手に置　道哉

ゆたかなる君が御代にもうまれきて今見しまふ花をこそ見れ　友阿

むかしにもかくありてや残るらん雲のうへなる人をまちつつ　祐庵

春風にながるる滝のしらなみて神のこころやなほもたえまじ　久阿

時をえて神のいがきにさく花のめぐみも露かかるところさ　元清

巻頭の松と云る八郎殿下の御手にて御哥にかかりていつも松とかせ給ひて長門国赤間関の阿弥陀寺にて平家追悼の御会ありし時の御哥にも松といふまくら詞もあるがゆゑかしきを撰ひて挙げ太かさは煩はしさに省きもらせんともおもひつれどもかく六くの数をみて奉納しつるには故あるべしとてここに載せつ

○天正十八年八月廿五日当院にて

しまくもよせくる霧のまがき哉　紹巴

なみに底ちかく月のうかぶ乃　良政

こぎいづる秋の夜舟のかぢとりこゑ　昌叱

○九州豊の紀因大聖院の良政発句所望ありて十三日一会ありし

当社にうみの池といふあるを

このげうつも月やうみの池乃みづ　玄旨法印

○長嘯子の記行に曰下の年安芸のいつくしまに詣てひとよせつらしまくぐりし時やどりける坊の主をたづね侍りしにしるしまかりぬと弟子なりける法師のかたりけるいまはもへそのころ七十ぢかくもなりぬと見えつるもしむべきよはひなりしはなれどもまさこうつりぬ道はいとこのなしうなん思ひ見て物語などせしかどもひと昔になりにける何事もちかなき事とみなりはててさながらつみぬむかしとなりにける坊の泉水のおもしろき草木などうちたてきたりなるをかし人のてづからうゑし草木ゆゑ庭もまがきもむつまじきかな　長嘯子

と作られたるかな人袖をなんぬらしけるその庭の内に松の


社僧
西方院
修善院
執行坊
東泉坊
多聞坊
西方院にやどりて
岡田清
西方院
多聞坊
修善院
執行坊
東泉坊


其二
松ノ坊
村井氏
上ケイ
訪棚守氏別墅
鹿猿居　岡田士亨
神洲勝概已難描
况是林園幽事饒
松度三春增秀色
花經昨雨逞芳嬌
豈辭綠酒憑詩酌
但笑青燈爲老挑
我亦何年與猿鹿
隨君此地伴山樵
棚守屋敷
祝師

づらいと大きなる石あり苔むし物ふりたるさまいとゞも
しろき松ひとりたてりつらつらおもへばこのかのてらはもありな
んこまではいかなるんたくみの人もえやは於よぶましかる種
しあまれ岩ほにもとせなながらへられし

今按にこの文ある坊とおぼしく記して寺号をいはずといへども島内の林泉第一の佳なるは當寺と西方院とのみ両寺のあはひ今姿しげきしといへども暫くここに引て後の考を まつ

瀧本坊 大聖院の東にあり社僧なり開基詳ならず

本尊十一面観音 法長五寸七分　脇士不動 法長三寸八分　毘沙門天 法長三寸○天和年中に京師仁和寺の末派となれり

毛利輝元卿などの書翰あまたを藏せり

龍燈院 同所にあり開基詳ならず

本尊不動 法長三尺弘法大師の作　脇士矜羯羅制吒迦 共に法長一尺五寸

相傳ていはく當寺の本尊は弘法大師一刀三禮の御作にして往時大同年中弥山に於て虚空藏求聞持修法の時一千座の護摩修法ありき故を以て自ら彫刻したまへるにて霊験今に不可思議なりといふ

龍燈杦 同寺にあり往昔龍燈のあがりけるよしをいひ傳ふ今は枯てなし弥山にも龍燈杦あり已の巻にいへり

増福坊 中西町にあり天和年中に京師仁和寺に属す開基詳ならず　本尊不動 法長一尺一寸

愛染院 増福坊に同じ社僧なりしが以下之に次しかり　本尊不動 法長一尺一寸○天和年中京師仁和寺に属す開基詳ならず

影向石 愛染堂の前にあり本尊の明王この石に影向したまふといふ

菩提院 同上　本尊不動 法長一尺二寸二分　脇士矜羯羅制吒迦 共に法長六寸四分

當寺は両宮の常夜燈および常香燈を掌る昔毛利氏より常燈料を寄せられし其書翰あり

西方院 瀧町にあり開基詳ならず中興元宥上人　本尊不動 法長七寸　脇士矜羯羅制吒迦 共に法長七寸

什寶

古法眼画屏風　土佐光起画　同光成画

當寺はむかしは東坊と称せり天正年中仁和寺の御室仁助法親王に

の為に御止住ありし故を以て西方院家の号を賜ひて御門下に准ぜられき抑仁助法親王と申したてまつるハ伏見宮貞敦親王の御子にておはしまして後奈良天皇の御猶子なり紀竹の園生におひたゝせたまひしかバ佛門に入らせたまひしとて何の苦もなき御身なれど御法流御再興の御志願ふかくおはしましゝにより斗藪行脚の墨染に御衣をやつしたまひ玉敷の都をあくがれて西國のきに御下向ありしに當島大聖院良辨の遺弟良政幼して法勢ひ堪へざりしかバ示諭懇懃の御為につひに此島に御留錫なしたまひけり世こぞりて嚴島の御室と称し奉り紀然るにいかんともしがたき無常轉移の世のならひたゝ假初の御違例と見えしに日を逐て悩らせたまふ御氣色なりければ大聖院ハ釈つかうも死職たと思むて神人にひとしき様バ遠に御病牀を當院へうつし奉りてつひに一日二日つゆ夕の露と消えさせたまひぬ即ち御遺體をバ赤崎といふ所に掩葬しまつりぬ今もその地を御室山としのふなるもこの故となん　○大元社 境内に勧請 社僧持次

當院の林泉ハ雪舟の作にして[illegible]加賀の三千風といふもの記をつくりて称賛せりその文今畧次

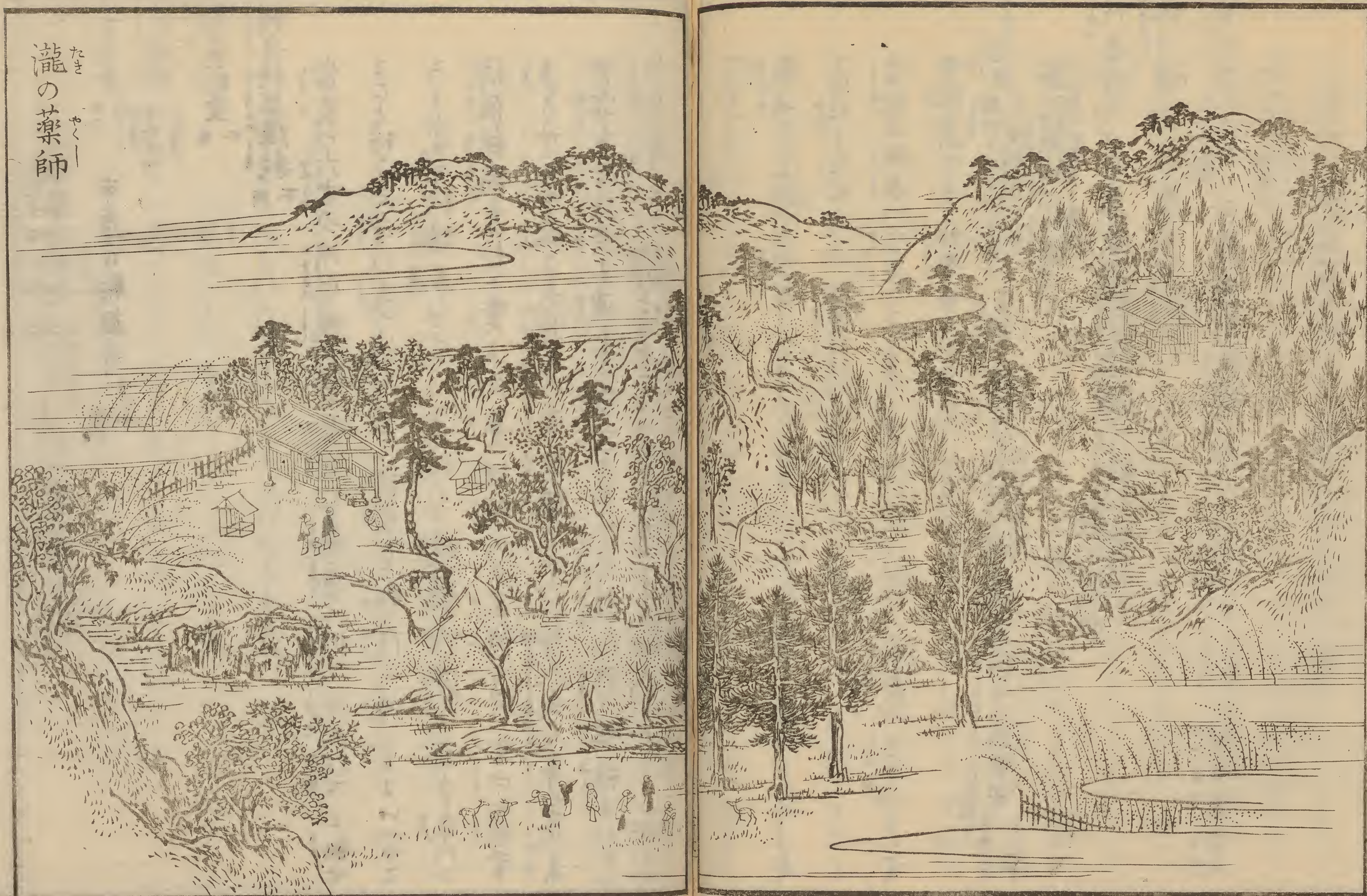
多聞坊 瀧町にあり寛基詳ゟ寺ハ次中興ハ永意 本尊毘沙門 御長三尺五寸 弘法大師の作 脇士不動十一面観音 各御長二尺六寸

修善院 同上 五分○當坊ハ弥山の本願なり 天和年中仁和寺に屬次 本尊釈迦 御長一尺七寸○この坊に権律師増弁補職の状吉川元春の書翰などの古文書あり

執行坊 同上 本尊不動 御長一尺二寸

東泉坊 同上瑠璃山と号次 本尊薬師 御長三寸 春日作 脇士十二神将 御長各一寸六分同作 ○鎮守粟島大明神社境内にあり

什宝 倶利迦羅不動一幅 弘法大師筆○外に毛利家より寺領寄附の状等あまた藏せり



瀧(たき)の薬師(やくし)

松坊 上に在 本尊阿弥陀 御長一尺一寸 安阿弥の作 脇士観音勢至 御長各六寸

長楽寺 なし 上に同し 本尊日輪観音 御長六寸四分

荒神堂 瀧町の山上にあり

瀧薬師堂 同

棚守将監屋敷 下 同

當家は大宮の棚守職にして舞方をも兼司り従五位下に叙せらるゝことありき本の氏は佐伯にて苗字を野坂と呼るはいつのころよりぞ其職名を用ひたる即ち遠祖は大宮を斎き奉れる佐伯鞍職なれど實に瓜蔓連綿たる系譜なり年中の雑掌多き中にも殊に六月二日管絃講といふは神人氏人等を相集め其宴をなし次坐に連なる者おほよそ千有餘人終日酬暢をいたし祀盛會なり

相伝ふこの島に丸山九太夫といふ者ありけり射術に妙を得たりしかば鎌倉右大将の冨士乃狩にめされて惣勢の中より善射の人を精撰して僅に七十人を得たりしにこの九太夫また信濃国八幡の神主の家人丸山助太夫といふ者と二人負のうちなりけり然るに足利の澤辺三九郎といふ者両丸山はみな社家の下人なれば侍の中に入るべからずといひしかども那須与市宍戸四郎が撰なれぞとてそのまゝなりしに當時獲物のかず助太夫第一にて猪鹿三百頭第二丸山九太夫百八十頭沢邊はたゞ六十四頭を射留て七十人の中の下第にてぞありけるこれによりて人々うた作てうたひひろく丸山のそねみありしのはげしくて沢邊の廉恥にふれざりけるとてこれ全く俗伝にて正史の載せるところにあらずといへども記して看官の考をまつこの丸山社家の下人といへるを以て見れば棚守家の臣なりしか

九州道の記 七月の件 にいはく十日あまりも棚守連歌興行あるべきよし申しかども魂まつる月にはことさまつぎなきやうにやあるべきとて辞退したるにければ発句ばかりをと所望なりければ枉もひらけぞなかしき次のなさけならねば

秋やまづ菜やましけ山本とし次　玄旨法印

かやうにかつかはしたるければ晩に饗まうくべきよし所望行けるにいろいろの肴もとめて盃いくさかねて子息少輔之丞が中ついで乱舞ありて暇乞を出してまかりかへりしこと

中江薬師



弘中戦地 瀧町にあり

陰徳太平記曰上畧弘中三河守同中務少輔は本社の後なる観音堂の辺より入道小引別れ瀧小路を後にして五百余騎を二段に備へ追来る敵を待かけたる所に一番に吉川治部少輔元春追懸たまひけるを見て弘中父子元来戦死と思定めしことなれば何の会釈もなく驀直に打てかゝる吉川の先陣突立られて十町計引退きけれは元春これにいかりて自ら鑓を以て叩たてゝかゝり給ふ弘中父子も能敵なりと同に怒て味方をいさめ鑓を提け突合たりこれを見て吉川勢宮庄今田粟屋境朝枝森脇の者共命を塵芥よりも軽じて切て入ける故弘中父子突立られ瀧小路へ引退くを元春つゞいて追かけ給ふ所に柳小路より青景彦五郎波多野弾正忠町野左衛門尉大尾和兵庫頭等三百ばかり横合に突てかゝり吉川勢危

くみえしが熊谷伊豆守杵くれ馳ま来り渡り合て戦ふる間弘中青景ハ下総ま押立られて進え得ず弘中ハ怯る古兵なりけれど瀧小路の左右の家ま火をつけその紛れま引とり元春ハ弘中をバ遁すとも苦しからじ神殿を焼せそなとて敵ま与て因もろけれど此火を消させる隙ま弘中ハ大聖院のうへまで引退て暫く加へ合戦の成行果を窺て息継でこそ居たりけれ

中江薬師 中江町ま有り

若宮 日和勝谷某が屋敷地ま有り傍ハ陶全姜の霊崇りをなすまよりて後ま此所まその霊をまつりこれ毛利両川の三将をもともに斎ひてえたりとぞ神威灼然社内の物とたまいへバ塵芥のいさゝかなるも取れバこのたちま崇有り

牛王社 同上　祭神猿田彦大神

廢永元寺 中江町の奥ま有り

嚴島圖會卷之三終